

未来へつむぐ200年物語

100年住宅の歴史から学び、これからの100年を考える。

■古家解体プロジェクト／VOL.1

細田工務店では、住まいづくりを通して地球温暖化の防止に取り組んでいます。低炭素住宅による街づくりや、都市型ZEH（ゼッチ）「ストロングスマート」の供給推進に加え、古い木材の活用にも着目しています。東京西部のとある住宅地に建つ古家の解体もその一環でした。

この古家は江戸期の天保10年[※]より100年以上も現役であり続けた住宅で、単に古材活用の対象ということだけではなく、永く住み継がれる住まいに大切な多くの示唆を与えてくれるだろうという期待を持ち、プロジェクトが始まりました。その過程を記録として残す意味も含めて、数回にわたり、お伝えしたいと思います。

時を超えて現代に届いた、堅牢な江戸時代の住まい。

建物の強さ、それは、住まいの重要な資質となる。

古家の状態を確認していくなかで驚いたのは、様々な改築や補修はあったようですが、建築当初の主要な構造部分が残っていたと思われる点です。歴史のなかでは大震災を経験したり、激しい風雨にさらされた日もあったことでしょうか。何世代にもわたり住み継がれるためには、建物の強さがまず大切だということを、実証してきた住まいだといえます。また住む人が安心して暮らしていけるという点において、建物の強さとはある意味なよりの快適性なのかもしれません。



100年超住宅も、かつてはモダン邸宅だった (!?)。

人が住み続ける—その事実が育んできた、歴史と価値。

古家も最初から歴史的な建物だったわけではなく、家族の“新築住宅”として誕生したはず（この地域の豪農だったという話もあるので、新築当時はモダンな邸宅だったかもしれませんね）。その意味では、私たちがつくる新しい住宅も同様に、時を超えて残っていく可能性があってもいいはずだという見かたもできます。ご一家が代々住み続けてきたというシンプルな事実が、住まいとともに歴史となり、やがては一帯で知られる名所的な存在になっていきました。近年では地域コミュニティの拠点的な役割も担うなど、時を重ねるなかで豊かな価値を育んできたのです。

私たちも、同じような豊かさを未来に築いていくことができるでしょうか。皆様に永く住み継いでいただける住まい—その実現を目指したいと、思いを再確認させてもらえた気がします。